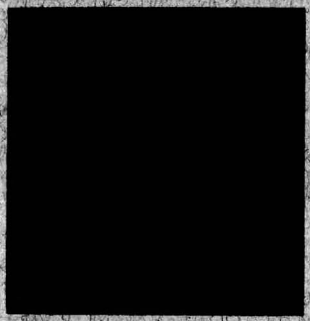
女のいくさ

佐藤得二著

女のいくさ



佐藤得二著

二见书房

昭和38年4月12日　初版発行

© Printed in Japan.

女のいくさ

定価 380 円

著者　佐藤得二

印刷　株式会社堀内印刷所

製本　株式会社徳住製本所

振替　東京 2639 番
電話　東京 (332) 6011 番
東京都千代田区神田三崎町2ノ26

発行　株式会社　二見書房

川端康成

★佐藤得二さんは私の高等学校の同級だが、今ごろ、この処女作のやうな長編小説を書き、これが巧緻、達練、充実、みごとな作品なのに、びっくりした。明治初年から今日までの、言はば「大河小説」で、その時代と世相のなかに、女を中心とした一家の人々の運命を確かに描いて、生彩がある。殊にけなげな女の愛と生とは、胸を打つものがある。

目次

1 バリカン床
トイレットのない汽車で……九
なんたって船来だ……一五
女遊びの第一歩……二三

2 初めての恋
お羽黒つける女……二九
夏の短か夜……三五
別れ……四二

3 北上川の青春
夜明けのころ……四九
鉄道と学校……五六
結ばれた全平……六三

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

4　神罰

女の子は三つから……七三
花ぬすっとと女ぬすっと……七九
女は辛抱……八九
狂乱の夜……九五

5　吹雪

早稲田の森……一〇三
父のもとへ……一一〇
二度目の破局……一一八

6　修業時代

赤ん坊をつれてくる生徒……一二七
光りと闇……一三七
父、浅草で開業……一四四
誇り高き母……一五一

7　結婚

つたやの開店……一五九

博多の暮し……一六八
錦を着て故郷に帰る……一七三
夫婦の危機……一八四
関東大震災……一九二

8 背信の夫

つたや再出発……一九八
乱れる思い……二〇五
決　心……二一二
離　婚……二一九
平穏な歳月……二二七

9 情痴のあと

秋　草……二三七
雪之亟変化の誕生……二四五
全平の死……二五六
美しい喪主……二六四

10 冷たい炉端

大東亜戦争……二七三
戦　災……二七九
正面衝突……二八八
第二の人生……二九八
劇的な引揚げ……三一一

11　死の十字

転　地……三二〇
雇われマダム……三二八
精一杯に生きてきた……三三六
あと書き……三四七

装幀　三枝正子

女のいくさ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

1　バリカン床

トイレットのない汽車で

酒井清の父親全平は、明治五年という変化の激しかった年に、今は福島市に編入されている清水村の旧家に生まれた。

下僕の住まいとカゴ置き場を両袖にした長屋門をくぐると、ひょうたん型の池が広がる。くびれの部分にかかった朱色の橋を渡り、七枚の大きな敷石を踏みつくすと、三間に二間の玄関が、瓦屋根を重たくのしかけてくる。

いかにも格式ある庄屋の構えであるが、いや、そんな構えだったから、といった方がいい。維新の大変革の波に乗りそこなった内証は、ひどい火の車だった。

苗字帯刀の家柄自慢の両親は、門前を通る小前の百姓が、頬かぶりもとらなくなった時勢を嘆くばかり、草一本抜くこともしない。そのくせ旧い友だちでも来ると、池の鯉を釣って料理しろ。お帰りにはカゴを差しあげろ。カゴかきがいないなら、定紋入りの弓張提灯つけて、お宅までお送り申せ。と、昔の格式だけは忘れない。

こういう両親と五人の弟妹を抱えた長男の安兵エは、同じく庄屋育ちの女房相手に、慣れない鍬を握って悪戦苦闘した。

五年の間に、女房は見違えるくらい陽にやけ、骨も太く逞しくなって、楽々と畑仕事をこなすようになった。それはいいが、発育のいい子を二人も生んで、家計はますます苦しくなった。もう、どうしようもない。と思案にくれている時、アメリカ出稼ぎの話を持ちこまれた。

「旅費はもちろん、食べる物から着る物まで、みんな向う持ちでよ。五百両ためるのに半年もかからない」

というのだ。話半分というが、半分のまた半分と見ても、めっけ物のボロイ話だ。三年辛抱すれば七、八百両になる。安兵エは、三人目を妊っている女房に因果をふくめ、大きな妹たちに両親の世話を頼み、周旋人につれられて横浜へ行った。それっきり、帰るはずの三年が過ぎても音沙汰がない。

留守宅は、池の鯉をとりつくし、十日に一丁の豆腐代にも事欠くようになった。土地も家屋も抵当に入って、利子代りの家賃を払って、先祖伝来の家に住んでいる。その家賃も何カ月か滞っている。この冬をどうして越すかと集まって思案した時奮起したのが、十五歳の次男全平である。秋の末の寒さにふるえる家族のひもじい顔を見わたして、

「おれ東京さ行って、仕送りしてよこすべから、みんな達者で待ってべす」

と、頼もしいことばを残して家を出た。フロシキ包みに兄の古着を二枚入れ、世話してくれる人につれられて、たよった先は神田の神保町にある床屋であった。

初めて乗った汽車では、小便をこらえるのに死ぬ思いをした。下等客車にはまだ便所がなかったし、駅でとまっている時でも、いつ汽車が出るかと心配で、みんなのように外に出て用を足すことができなかったのだ。

彼の元来の希望は、この汽車の機関士だった。日本の私鉄として最初の「日本鉄道会社」が、東北本線の工事を始めたのは明治十四年だったが、この頃は上野から仙台までで上がって、毎日何本かの列車がまっ黒いけむりを吐いて、全平の村外れを行き来していたのだ。全平はその機関車にのって、沿道の人に手がふりたくてしようがなかった。

「だけんどもな。くせえ煙ばり吸って、夜通し立って働いてるもんで、機関士は胸え悪くするんだと。それよっかもな、同じ機械でも舶来床屋の方が、ちっさくて小ザッパリして、なんぼ気楽か知んねえ」

と、世話する男は熱心に説いた。

それは学校の先生にも聞いたことがある。フランスのパリにいる日本大使館の人が、バリカン何とかという会社で作った髪刈り機械を、明治十六年とかに買って帰って紹介した。とても便利な機械なので、大阪や東京の鉄砲鍛冶や刀鍛冶がマネをして作り始めた。しかし舶来の本物には及びもつかない。日本人はしっかり勉強しなくてはいけない。そんな話だった。

「話に聞いたこたああるが、見たこたあねえです。そんたなめんどくせえカリクリなど、おらはあおっかなくて、さわれねべす」

「しんぺえすんな。おらんどこの甥コだて何とかやってる。おめえは器用な質だから、三年もしたら使えるようになんべぞ」

「そんだべすか」

舶来のカラクリに対する恐れと期待をもって上京した少年を、新しい主人は頭からアザ笑った。その店にもそのカラクリは一つあった。しかし宝物のように箱に入れて、飾りつけてあるだけだった。

「これにさわったりするんじゃねえぞ。こちとらの店が、こんなバカッ高えカラクリ使ってどうするんだ。ぶきっちょな毛唐人のマネを日本人がするこたねえ。こんなもん使わなくたって虎刈りにゃしねえ。見てみろ」

自慢する通り、ここの主人のハサミさばきは見事なものだった。

断髪令というものが出て間もなく、彼はいち早く「ザンギリ床」に見切りをつけた。チョンまげを切ってザンギリ頭にするだけの仕事は、すぐに行きづまると見た彼は、横浜の外人居留地にもぐり込み、強引に白人の床屋に弟子入りした。

支那人の相棒と一つ部屋に寝て、西洋バサミと剃刀の使い方を教えてもらった。その頃までの日本では、西洋風の十字鋏を使うのは、外科医者だけであった。

「その李さん、腕もよかったがバクチもうまかった。おれがやるたんびに巻きあげられるもんだから、白人の奥さんに、

ドンプレ・カードって何度もとめられた」

そしてとうとうその支那人を腕で抜いたことが、主人の大の自慢話であった。

彼にはもう一つ自慢話があった。新しい学生の町神田を「文明開化」の風の吹く所と見抜いて、十年前に店を開き、たちまち大きくしたことだ。

「これからの世の中あ学問だ。何でもかでも書生っぽさまさまよ」

それが主人の口ぐせだった。

だが、店に来る書生っぽの半分は、伸びるだけ伸ばした蓬髪を、月に一度クリクリに剃ってもらいに来る貧しい連中だった。それをするには、職人が昔から手がけた日本剃刀が好評で、西洋剃刀は嫌われた。うすい刃がガリンガリンと鳴るし、職人が下手でよく傷をつけるし、剃ったあとの伸びも早かった。

日本カミソリのそり跡がツルツルするのは、皮膚の表皮を削りとるためで、実は非常に危険なのである。吹出物寄生虫なども伝染しやすい。しかし、刀身の両側から刃をつけた西洋カミソリが衛生的だときまった後でも、片刃の日本カミソリを愛用する風は続いた。大正時代を終っても残っていた。

さて、縞の筒っぽうに縞の前だれ尻っぱしょり姿の全平は、主人の家族などには「全どん」と呼ばれ、客には「オイ、小僧」とか「小僧さん」とか呼ばれ、呼ばれるたびに何か用事をいいつかり、一心に立ち働いた。

店と奥を通じて、一切の下働きと使い走りが彼の仕事であった。そしてその仕事は、大部分が独学自習だった。これをやれ早く、という人はいても、こういう風にしてやれ、と教えてくれる人はなかった。

奥のおかみさんは割合親切だった。全平をこの店に世話してくれた人の甥の兄弟子も、薩にまわっては慰めてくれた。しかし、そういう人たちでも、人のいるときはロクに返事もしてくれない。下っぱの徒弟には情は一切禁物の掟のようであった。

「だめじゃねえか、こんな拭き方。水がビショビショだ」

「てめえ、どこに目えつけてんだ。そうじゃねえったら」

全平の先輩たちは、そんな風にしか口を利いてくれなかった。

彼は彼らの刈り落とす髪の毛を、床に落ちる前に吸いとるぐらいにして、手早く掃除しなければならない。床に散らばったり、足にくっついたりしたら、大変な小言を食う。しかし、ほうきを持つ全平の手がちょっと早かったり、仕事中の人にさわったりすれば、鋏や剃刀の柄が頭にゴツンと来る。しもやけの足先を踏んづけられる。しかし、客のいる所で悲鳴をあげることはできない。

床の拭き掃除がまた大変だった。主人が白人の店にマネて作らした変テコなモザイックの床を、おからをつけて磨くのだ。どんなに忙しい日でも三回、普通の日は六回、堅くしぼった雑巾で汚れをとってから、乾いたボロ布でキュッキュッ

とこする。隅から隅までいつもテラテラにしておくためにはずいぶん力が要った。

まっ赤になった膝で這いずって、床をなめるような恰好で、袷の肌に玉の汗を流している全平に、だれも体をよけてくれない。うっかり触ると手先を踏まれ、尻を蹴とばされる。

食卓に呼ばれるのも最後だ。まっ黒に焦げた飯、実が一つもなくなった汁、石ころのようなたくあんの尻尾。一日十五日だけは、鰯の焼いたのを一匹か二匹、おかみさんがそっと足してくれる。有難うございますと涙ぐんで、全平は骨ごとむさぼり食った。

御殿女中だけではない。「小僧と障子は張るほどいい」とされた社会では、年少の新参者に対する過度の虐待は、ごく当りまえのことだった。全平もその覚悟でやってきた。だが、おれのいわしの裏半分を食ってしまった上に、親方の命令でやる仕事の邪魔までする兄弟子というものは、どこまで根性が悪いのか。畜生、覚えてやがれ、と彼は呪った。

しかし不思議なことに、蹴とばされながら十日十五日と辛抱するうちに、だんだん人の仕事の具合が分ってきた。この次はこう動く。足がこう出る。と予測できるのだ。仕事にかける時間も短かくなった。

そうしてできた僅かのヒマには、調髪台に近よって兄弟子たちの仕事を見ろといわれる。「見習い」という文字通り、ただ見ているだけであるが、全平には理髪修業の最初のチャンスであった。そうして見習いする時間の多くなった彼に、ある日親方は一挺の日本剃刀を手渡し、

「研いでみろ」

といった。店に入って実に半年目のことであった。

研ぎ方の注意なんか、だれもしてくれない。見よう見まねでやるだけであるが、全平は田舎にいるとき鎌や鉈のほかに、庖丁を研いだ経験がある。カミソリだって、父親のヒゲ剃り、母親の頭の中剃りに、なんべんも研いだことがある。よし来たと、仕事の合間合間に必死になって研いだ。

「はい、親方、できました」

立派なできばえを賞めてもらおうと、全平の差し出すカミソリを、親方はしかしジロッと見ただけであった。バシバシと砥石にあてて刃を落とすと、放りつけるように返してよこした。

「これだけ念入りに研いだのに、どこが悪いというのだろうか」

全平は呆れて親方のことばを待ったが、親方は振りむいてもくれない。全平はまた熱心に研いだ。カミソリは一面に青くピカピカ光るようになった。しかしダメだ。前のようにして、カミソリは刃をおとされ無言の裡に返された。

「これだけ切れるのに、一体どこが悪いというんです。何とか言ってくれてもいいでしょう」

と、叫び出したくなるのをこらえて、全平は三度目を研いだ。今度は前の倍以上も時間をかけて、ていねいにといだ。だが、やっぱりダメだった。四度、五度、すり減った指先から血が

にじんで来た。

「くそっ、なにくそっ。指をすりつぶせというなら、すりつぶしてやる」

暗涙をのみ下しながら、必死の闘志をかき立てて研ぐのに、親方はよしと言ってくれない。全平の指先から血の出ていることにも、知らん顔だ。その晩の彼は、親方のつらさと指の痛さに泣き寝入りした。

ここが、当時の職人として一人前になるかどうかの境目であった。根性のない少年は、床磨きの段階あたりでへこたれて、家へ逃げ帰ってしまう。それで残った者も、ここらで大概姿を消してしまう。全平は踏みとどまった。彼の負けん気が強かったためばかりではない。彼の家は遠く貧しく、近くに親類も何もなく、逃げ出すすべはなかったのだ。

彼はあくる朝目をさますと、なにくそっと奮起した。そうする他なかった。そして研ぎに研いだ。しかし不合格、また不合格であった。その晩はやけくそで熟睡したが、三日目と四日目は、体の節々が痛んで寝つかれなかった。指先はバカ見たいになっていたが、あちこちのうずきに、彼は何度も唸り声を立てた。

「うるせえぞ。静かにしろ。唸りてえなら外に出ろ」

隣りに寝ている兄弟子は、全平の脇腹をこづいてどなった。このままでは殺されてしまう。飛んでもない店に奉公したもんだ。夜が明けたら逃げちまおう。土方だってこれよりはましだ。と全平は思いつめた。

しかし、どうした訳かその朝、全平の体はスッと楽になった。あくる日はもっと楽になった。どうせ暇つぶしだ、恰好さえつけてれやいいや、という気になって、次にはそんな不貞くされた気持も忘れて、ただスイスイと腕を動かしていた。力まないせいか疲れもしない。

「うん、よし。どうにか使える」

と親方にいわれた七日目には、うまくやろうも早くやろうもなく、ただ無心に手を動かしていた。

そのときの剃刀の色と、自分の脛の毛でためしい切れ味を見て、全平はなるほどと思った。このコツは、いくら教えられても解るはずはない、と悟った。だが、剃刀は三分の一ほどに細くうすくなり、それを支える彼の指先は完全に磨滅して、平たく異様な光りを帯びていた。全平は指紋のない人間になった。そしてこの点だけは、一人前の理髪職人になったのだ。

その次はフケとりだった。店のヒマな時を見計らって親方が、ブラシかけて見ろ、といいつける。

何でもないことだと引き受けて、サッサッとブラシをかけ始めたが、いつまで経ってもいいと言われない。いつも見習っている何倍というほどこすっても、親方は黙って坐っている。全平の腕がなまって動かなくなる。

「何をしているんだ」

と叱られ、くそっと元気を出しても、すぐゲンナリする。肩が抜けそうになる。しかしそれも四、五日が頂上だった。一週間したら、いくらブラシをかけても疲れなくなった。五分

十分とやればやるほど調子が出てくる感じである。このとき初めて親方は、よしやめろといった。全平は心中でザマア見ろといった。稽古台になる人間の苦労は考えもしなかった。

その年の暮れに新弟子が入って、彼は床磨きから解放され、自分の脛の毛で試した腕前で、書生頭の下剃りの方に廻った。新弟子は尻をもたげて、ノロノロと床を這った。近くに来たのを見すまして、全平は思いっきり蹴とばした。新弟子は恨めしそうに彼を見た。

「こいつあ無器用だ。そのくせ生意気だ」

痛いぞ小僧、と剃刀づかいを客に叱られた仕返しに、全平はもう一度新弟子を蹴とばした。おれの時はもっと力を入れてこすった。おからも余り使わなかった。それなのにおれは、もっと意地悪く邪魔され、もっとずっと辛かった。こいつは甘やかされている。おれの布団を今朝は知らん顔しようとした。今に野放図がなくなるぞ。と、全平は兄弟子心理を燃やした。

だが、新入りをいびること以外に、兄弟子に共通の立場はなかった。親方が少しずつ教えてくれる技術に、自分の工夫を加えた仕事のコツを、彼らは決して交換しようとしなかった。自分のものはかくして、人のものを盗もう盗もうとした。

油断も隙もないような明け暮れだったが、工夫好きの全平には少しも辛くなかった。兄弟子が減り弟弟子がふえると、徒弟生活もなかなか楽しいものになった。

まる二年すぎた頃には、ハサミについてもカミソリについても、櫛の扱い方についても、彼は自分で苦心し工夫したコツを、いくつもいくつも貯えていた。親方に意見を求められることもあった。こういう弟子に対しては、親方も技の出し惜しみはしない。はじめは傍に寄るのも怖かった親方との語らいを、全平は楽しいものに思い始めた。

全平の鋏の腕は、神田かいわいで一番、といわれる位に上達した。普通の職人より二年以上早いと認められ、親方よりも彼の方を喜ぶ客が多くなった。チップも多くなった。

しかし、親の家へ仕送りできない点では、新入り時代と余り変りがなかった。姉の一人を村内の親類に片づけた後、母親が病気勝ちになり、嫂と妹がひどく苦労している様子は、弟のハガキでも知れた。全平はこの腕前を只で働かされるバカらしさを、しきりに考えるようになった。

そのころ確立した商家の慣習では、兵隊検査のすむまでは、タダ奉公の修業時代で、一年二回の藪入りに三銭から五銭ぐらいの心付けをもらうだけであった。

兵隊から帰ってきて、お礼奉公というものをする。その時初めて給金らしいものを月に二十銭から五十銭もらう。一円という店もある。そして使い込みもバレないで二、三年辛抱したら、小さな店とお嫁さんを世話してもらって独立する。それから先は腕次第運次第ということになるのだが、全平にとっては七、八年さきのことになる。

「今すぐ開業したって、どこの店にも負けはしない。家に仕送るぐらい訳はない」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook